

## エレノア・マルクス

都 築 忠 七

本稿は、現在、私が準備をすすめている *The Life of Eleanor Marx* の大要をまとめたものである。エレノアの劇的な生涯は、ラッサールと比較されたことさえあつた<sup>(1)</sup>。しかし十九世紀の最後の二十年間、社会主義の復興と演劇の復興とが同時に英国を訪れた時代、彼女が果たした役割については、それが直接マルクスと結びつくものであるにもかかわらず、いまだに十分な評価があたえられていない。従来、エレノアの描写は主として断片的なものにとどまり、そうした不十分な素材の上につくられたエレノアのイメージは、あるいは右派社会主義者批判のために神秘化され<sup>(3)</sup>、あるいはマルクス主義を諷刺するためにゆがめられてきた<sup>(4)</sup>。「モスクワのマルクス姉妹」によって描かれた『マルクスの娘たち』<sup>(5)</sup>は、二人の姉ジェ

ニイとローラとならんで、エレノアの生涯を要領よく簡潔に伝えているが、十分な分析が行なわれていない。

マニユスクリプトについて一言すれば、モスクワのマルクス主義レーニン主義研究所の所蔵するエレノア関係の資料の一部が、いまだに公開されずにいるのは不幸なことである。しかしさいわい私は、一九六三—四年のヨーロッパ滞在中、人々の好意により、各地に散在する幾多の未発表のエレノアの手稿、主として私信に接することができた。そのうち、『エンゲルスロラファアルグ往復書簡集』の編集者エミール・ボッティジェリ氏 (Emile Bottigelli) / ロンドンのミュアリアル・ラドフォード博士 (Dr. Miriel Radford) / アムステルダム国際社会史研究所、東ベルリンのマルクス主義レーニン主義研究所

および大英博物館マニユスタリメント部の関係者各位に、  
とくに謝意を表した。我が国でも法政大学大原社会問  
題研究所に、エレノアの手紙五通が所蔵されてゐるが、  
これは同研究所の好意により Society for the Study of  
Labour History, *Bulletin*, no. 8 (Spring 1964) に発表さ  
れた。そのほか、すでに発表された資料のなかでは、  
Wilhelm Liebknecht, *Briefwechsel mit Karl Marx und Frie-  
drich Engels* (The Hague, 1963), VII. Briefe von Eleanor  
Marx-Aveling 49-53 E. P. Thompson, *William Morris*  
(London, 1955), Appendix II. Correspondence between J.  
L. Mahon and Frederick Engels, Eleanor Marx-Aveling  
and Others, 1884—98 などがある。(6)

(1) William Collison, *The Apostle of Free Labour* (Lon-  
don, 1913), 81.

(2) H. M. Hyndman, *Further Reminiscences* (London,  
1912), Ch. VI.; Eduard Bernstein, *My Years of Exile*  
(London, 1921), Ch. VII—X.; Havelock Ellis, 'Eleanor  
Marx', *Adelphi*, Sept.-Oct. 1935; Felix Barker in *New  
Yorker*, 27 Nov. 1954; E. P. Thompson, *William Mor-  
ris, passim*, 430°

(3) Allen Hutt, 'Eleanor Marx', *World News*, no. 22.

(4) Lewis S. Feuer, 'Marxian Tragedians: A Death  
in the Family', *Encounter*, November 1962.  
(5) 独訳 Olga Worobjowa & Irma Simehnikowa, *Die  
Töchter von Marx* (Berlin 1964).  
(6) 私がヨーロッパにおける調査の中断を余儀なくされた  
あと、資料蒐集について、ロンドン滞在中の静岡大学教授  
杉山忠平氏の協力を得たことに感謝の意を表したい。

\* \* \*

エレノア・マルクス (Jenny Julia Eleanor Marx) は、  
一八五五年一月十六日、ロンドンの騒々しく不潔な外国  
人居住地域ソーホーの一角、ディーン・ストリート二八  
番のユダヤ人リース商人の家で生まれた。その二部屋  
の貸間でカール・マルクスとその家族がすごした六年間  
は、彼の生涯の最悪の時期であった。一八四八年革命崩  
壊後の政治上の孤立は、彼の経済学研究にとってむしろ  
好都合なものであったかもしれないが、貧困と屈辱の亡  
命生活は、彼の私生活をひどく攪乱していた。その悲惨  
と混乱に拍車をかけるかのように、マルクスの忠実な召  
使ヘレーナ・デムート (Helena Demuth) までが、一八  
五一年六月二三日、父親不詳のうちにマルクスの庶子とみ

なされるようになった(男子フレデリク(Henry Frederick Demuth)を生みおとした<sup>(1)</sup>)。

しかもマルクス夫人ジェニイがロンドンで生んだ子供は、エレノアを除いていずれも夭逝し、ブラッセル生まれの長男エドガーも、エレノアと入れかわるかのようになり病死した。事実エレノアは、ロンドンにおけるマルクスの家庭的な苦悩と希望を一身にあつめて、彼のいう「世界市民」(Weltbürgerin)<sup>(2)</sup>として誕生したのである。

(1) Somerset House の出生記録による。

(2) Karl Marx to F. Lassalle, 23 Jan. 1855, Marx-Engels, *Werke*, Bd. 28 (Berlin, 1963), 612.

しかし彼女は、マルクス家ただひとり、英国国籍をもつ英国市民であり、家族も、その日常語が当時すでに英語になったほどであって、とくに一八五六年、郊外のハムステッドに転居したあとは、次第に英国中流階級の生活にとけこむようになった。家族は相互に愛称を用い、父親カールは、その褐色がかかった顔色から「モーア」とよばれ、エレノアは、彼女が可愛がった小猫がなまって「トゥッシー」(Tussy)とよばれた。トゥッシーの学校教育は十分なものではなかったが、モーアは彼女のよ

き友人かつ教師であった。マルクスは彼女のために、すばらしい物語をかたててきかせた。これが「ハンス・クレ」(Hans Rökke)の玩具の冒険である。ハンスの小さな玩具店には、巨人やこびと、国王や王妃、労働者や雇主の木製の人形がならべられていた。ハンスはホフマンのような魔法使、そしてマルクスと同じように金にこまり、悪魔に玩具を売りとばすが、玩具は様々な冒険のあと、いつも彼の店へかえってきた。この物語は、商品流通の悪魔的なプロセスのなかに人間が自己を疎外するブルジョアの生活を、そうした生活を余儀なくされる創造的な芸術家ハンス、すなわちマルクス自身を、彼が皮肉った寓話であつた<sup>(1)</sup>。

(1) Eleanor Marx Aveling, 'Karl Marx', *A Few Stray Notes, in Reminiscences of Marx and Engels* (Moscow, n. d.), 251—2. <sup>9</sup>と<sup>10</sup>と英語で書かれたが、<sup>11</sup>は<sup>12</sup>も 'Karl Marx: Lose Blätter' と<sup>13</sup> Osterröichische Arbeiter Kalender (Brünn, 1895), 51—54 に発表された。

しかしトゥッシーも、二人の姉と同じくモーアを通じて、次第にプロレタリアートの政治に関係するようになった。とくにフィーニアン党のアイランド独立運動に強い関心をもち、当時十歳のエレノアは、「以前、私は

人間に固執したが、今、私は民族に固執する」と宣言している。<sup>(1)</sup> やがて彼女は階級に固執するようになった。一八七一年四月、姉のジェニイとともにポルドーへおもむき、姉のローラ——今ではパリー・ロシエーンの密使ポール・ラファルグ (Paul Lafargue) の妻——に協力した。そのころエレノアは父の秘書をつとめ、インターナショナル崩壊の内部事情にも精通していた。<sup>(2)</sup>

(1) Eleanor Marx to Engels, 13 Feb. 1865, IISG (マムステルダム国際社会史研究所)。南北戦争や一八六三年のポーランド叛乱について、彼女がオランダの大叔父リオン・フィリップに送った手紙は、W. Blumenberg, 'Ein unbekanntes Kapitel aus Marx' Leben: Briefe an die Holländischen Verwandten', *International Review of Social History*, 1956—1に収録。

(2) マルクスが反対をおしきって、本部のニューヨーク移転、インターナショナルの実質的解散にふみきったことについて、「最後は自発的なdecentなものでなければならぬ」と彼自身語っていた。Eleanor Marx Aveing to Kautsky, 3 Dec. 1896, IISG.

七〇年代ロンドンの外国人サークルは、「コミューン亡命者の合流によって活気をおびていた。そのうちブルードン派の社会主義者でラファルグと同じく医学生のシャ

ール・ロンゲ (Charles Longuet) はジェニイと結婚し、ロシエーンのジャーナリストのリサガライー (Hippolyte Prosper Olivier Lissagaray) はエレノアの婚約者になった。

しかしリサガライーの場合、バスク人特有の強烈な個人主義がマルクス理論の受容を妨げ、ラファルグ夫妻も冷たく彼をあしらった。一時はマルクスも、エレノアがリサガライーと会うことさえを禁じ、エレノアは絶望のあまり、病気になった。<sup>(1)</sup> 一八七四年の夏、マルクスとエレノアがボヘミアの湯治場カールスバードへおもむいたのも、マルクス自身、家族関係の感情的側面を整理する意味があったようである。とにかくマルクスの禁制は撤回され、ロンドンに帰ったエレノアは、リサガライーの新しい雑誌 *Rouge et Noir* の発行を手伝った。この雑誌は、階級闘争にふれながら反動的なフランス国民議会を批判したが、<sup>(2)</sup> 第三号をもって廃刊となった。リサガライーの古典的なロシエーンの歴史 *L'Histoire de la Commune de 1871* は、一八七六年ブラッセルで出版されたが、エレノアは、パリにいたドイツ社会民主党のカール・ヒルシュ (Carl Hirsch) を通じて、資料の蒐集に協力したよ

うである。<sup>(3)</sup>この書物は、コミューンの側から書かれたその詳細な事実の歴史であり、その全貌をできるだけ客観的に伝えることによって、敗れた者のために社会復帰のみちをひらくのに貢献した。部分特赦と完全特赦との対立が、共和国と社会主義との対立を激化させたが、一八八〇年、実質的な完全特赦がロンゲやリサガラリーの帰国を可能にした。とりのこされたエレノアは、自らの活路を演劇の世界にもとめるようになった。

(1) リサガラリーとあうための切々たる訴えをエレノアはマルクスに書いて送る。Eleanor Marx to Karl Marx, n. d., photocopy, Bortigelli Collection.

(2) *Rouge et Noir*, 24 Oct. 1874.

(3) Eleanor Marx to Karl Hirsch, 12 May 1896, SSLH, *Bulletin*, no. 8. エルシヒはリ警察の監視下におかれ、マルクスおよびエレノアからの手紙の多くは開封されていた。Préfecture de Police Secrétariat General Archives, photocopy, IML (Berlin). エレノアはこの書物の英訳に着手し(一八八六年出版)、その原稿はマルクスによって修正された。

すでに六歳のとき、エレノアはシェークスピア劇のいくつかの場を暗誦することができ、父母を相手にハムレットを演ずることもあった。<sup>(1)</sup>やがて彼女は、言語学者の

ファニーニヴァル(Frederick James Furnivall)がはじめた新シェークスピア協会に参加し、その周辺にあつまった文学愛好者、若い弁護士のアーネスト・ラドフォード(Ernest Radford)やのちにその妻となるドリー・メイトランド(Dollie Matland)らとともに、スクリーブなどフランス劇作家の小品を演ずるようになった。ディレットタント劇場でこれを見たエンゲルスは、「トゥッシーは強い感情を示す場面でたいへんよかった」とマルクスに伝えている。<sup>(2)</sup>しかし舞台にたいする野心について、両親の危惧と反対を克服することは容易ではなかった。母のジェニイは一八八一年十二月、エレノアを理解することなく死亡し(そのように彼女は信じた)、家族関係のあらたな危機のなかでマルクスが彼女の願いをいれたのは、その後のことであった。それとともに彼女は、十年間にわたるリサガラリーとの婚約解消の悲痛な決意をかためたのである。<sup>(3)</sup>しかし一八八三年一月、姉ジェニイが、二カ月後にはマルクス自身が死亡し、エレノアの独立は孤立をも意味するようになった。このとき登場したのがドクター・エイヴリングである。

(1) Eleanor Marx Avéling to Karl Kautsky, 1 Jan.

1898, HSH.

- (2) Engels to Marx, 7 Juli 1881, Marx-Engels, *Briefwechsel IV* (Berlin, 1950), 590. 彼女が得意とする作品は Thomas Hood の 'The Bridge of Sighs' や Robert Browning の 'The Pied Piper of Hamelin' や 'Count Gismond' など。あとの二作は一八八二年のブラウニング協会恒例の演劇会で、エレノアによって朗誦された。
- (3) Eleanor Marx to Jenny Longuet, 15 Jan. 1882, Bottigelli Collection.

\* \* \*

エドワード・エイヴリング (Edward Ribbins Aveling) は一八四九年十一月、ロンドンの組合教会派の牧師の四男に生まれた<sup>(1)</sup>。ロンドン大学で生物学を専攻し、博士号をとり、ロンドン病院やキングズ・カレッジで解剖学などを教えたが、自然研究を通じて次第に無神論に接近し、そのため妻のイザベルと別居するようになされた。

社会運動としての無神論ないし非宗教化運動 Secularism は、その起源をロバート・オーウェンに負うものであり、理性と科学にたいする信仰を出発点とし、功利主

義道徳と人間環境の改善とを指導原則とするものであった。この運動の中心は、「偶像破壊者」の別名で知られるチャールズ・ブラドロウ (Charles Bradlaugh) と、彼が一八六六年に設立した全国非宗教化協会 National Secular Society (NSS) とであり、NSS の運動目標も、設立当初は、宗教に起因する政治的不平等の除去や非宗教的教育制度の確立とされたが、やがて「大衆の政治的解放」や「貧困と社会的墮落の原因除去」が付加され、大土地所有や富の不平等な分配が批判された。七〇年代には、フランスにおける第三共和国の設立に刺戟されて共和主義運動を展開し、新マルサス主義を標榜して産児制限運動をはじめ、政治的には急進派の一翼を形成していた<sup>(2)</sup>。一八七九年、エイヴリングもこれに参加し、ブラドロウや協力者のベザント夫人 (Mrs. Annie Besant) に匹敵する名声を確立するようになった。

(1) 従来、彼の小伝は出生年を一八五一年としたが、これは誤りである。

(2) John Edwin McGee, *A History of the British Secular Movement* (Girard, Kansas, 1948), *passim*.

当時彼は、ダーウィンやシェリーに関する幾多の論文

を発表し、自然を媒介とする科学と芸術の総合をめざしていた。「科学的思考と詩的思考とのあいだに存在する同類性」を、各種感覚器官の「類似性」によって、説明しようとしたが、そうした自然観に立脚する彼の宗教批判は、耽美的な快樂主義と結びついていた。「キリストが泣いたと聞かされるが、彼が笑ったとはどこにも記録されていない」と彼はいう。<sup>(2)</sup>晩年のダーウィンを、訪れ、無神論について議論するが、ダーウィンの死後、彼が生前、神の啓示を信じていなかったことを示すドイツ人の学生にあてた手紙が公表され、その公表に関係したイエナ大学のエルンスト・ヘッケルに私淑するようになる。エイヴリング自身、「進化の福音」を説き、愛も希望も恐怖も、生命のすべてが、物質とその運動とによって説明されるという科学の福音が、キリスト教にとってかわるべきものと主張した。この福音を通じて彼は、生の歓喜を、最大多数の幸福をうたったのである。<sup>(3)</sup>一方、戦闘的な無神論者にたいする弾圧がはじまった。ブラドロウも、一八八〇年の総選挙でノーザンプトンから選出されながら、議員としての宣誓を許されず、議席を拒否された。週刊紙 *Free thinker* の編集者フート (G. M. Foote)

は、神聖冒瀆を意図した論説や挿絵を発表したかどで、一八八三年、十二月の禁固刑に処せられ、その間エイヴリングは、この雑誌およびフートの編集した月刊の評論雑誌 *Progress* の臨時編集者として活躍した。

(1) ダーウィン理論の祖述は主として *National Reformer* 紙上に発表され、*Student's Darwin* (London, 1881) にまとめられた。シャーリーは、Percy Bysshe Shelley, *Modern Thought*, Dec. 1880 が参照。

(2) Aveling, *The Sermon on the Mount*, n. d., 3.

(3) Aveling, 'The Gospel of Evolution', *Atheistic Platform* (1884), 48. なお Aveling, *The Creed of an Atheist*, n. d., 7 参照。

パリ・コミュニケーション以来のブラドロウとマルクスとの対立にもかかわらず、非宗教化運動と社会主義との境界線は、必ずしも明白にひかれてはいなかった。<sup>(1)</sup>一八八二年、エイヴリングはロンドン教育委員会選挙に立候補し、NSF だけでなく、マルクス主義に接近しつつあったハインドマンの民主主義連合からも支持を得て当選し、委員会の会合では、宗教教育を攻撃しただけでなく、提案された「社会経済学」の教科内容が資本の「ドグマ」であると批判している。<sup>(2)</sup>マルクスの葬儀参列者のなか

で、すでに彼は主要な地位を占め、エレノアのマルクス略伝および剰余価値論解説が、彼の編集する *Progress* 紙上に発表された。<sup>(3)</sup> エレノア自身、「無神論と社会主義とは同一物である」と宣言し、「宗教上の自由思想はかつて上流階級の特権であったが、今では労働階級の特権になりつつある」と、大英博物館読書室で知りあったピアトリス・ポター（のちのウェップ夫人）に語っている。<sup>(4)</sup> 非宗教化運動と社会主義との結合は、エイヴリングとエレノアとの結合をも意味していた。

(1) 社会主義と急進主義の結合をめざして創刊された *Modern Thought* は、一八八一年十二月号に、E. Beloff Bax の手になるマルクスの小伝と『資本論』第一巻の紹介を発表した。非宗教運動の機関紙のひとつ *Republican* (Nov. 1882) も、匿名のマルクス評伝をのせている。

(2) *School Board Chronicle*, 21 July 1883.

(3) *Progress*, May, June 1883.

(4) Beatrice Webb, *My Apprenticeship* (London, 1926), 258—9n.

\* \* \*

一八八四年六月、エレノアはエイヴリングと結婚生活

にはいることを、姉のローラに通知した。エイヴリングには別居した妻があり、エレノアは正式に結婚できなかったが、「愛情、趣味と仕事における完全な共感、ならびに同じ目的のための努力」が人を幸福にするならば、我々は幸福になるだろう、と彼女はドリー・ラドフォードに書いている。<sup>(1)</sup> エンゲルスも「わがロンドンには小さなバリ」とのべているが、エイヴリング夫妻の自由結婚は、月並みの道徳にたいする反逆であるよりは、むしろ実際の必要に迫られたものであった。しかしエレノアは、労働者の友人にたいしては、「虚偽の、真に非道徳的なブルジョアの習俗を一切排除した」と語っている。<sup>(3)</sup> このように彼女が、必要に迫られた自由結婚を原則の問題としてとらえたことのなかに、すでに悲劇の萌芽がひそんでいた。その上エイヴリングは、金銭問題、婦人関係について、たえず悪評にさらされていた。しかしこの点についてエンゲルスも、おそらく最初はエレノアも、それが政敵ブラドローとハインドマンの中傷によるものと信じたようである。

(1) Eleanor Marx to Dollie Radford, 30 June 1884, Radford Papers.



(2) Bernstein, *My Years of Exile*, 162.

(3) Eleanor Marx Aveling to J. L. Mahon, 1 Aug. 1884, Thompson, *Morris*, 860.

ハインドマンの社会民主主義連合が分裂したあと、エイヴリング夫妻は、ウィリアム・モリスをたすけて、新設の社会主義連盟を国際的なマルクス主義政党に発展させようと努力していた。当時のエレノアの主要な関心事のひとつは婦人問題であった。たまたまロンドンで大規模な少女の売春組織があるみに出され、売春取締のための刑法改正(婦人の同意年齢の十三歳から十六歳への引上げ)が行なわれた。エレノアは売春を「性支配」の問題とみなし、その解決は「階級支配の廃止」に依存するというペーベル婦人論の立場を援用し、エイヴリングと共同で『婦人問題』(*The Woman Question*, London, 1886)を書いた。真に一夫一婦制にもとづく、そして煩雑な金銭関係によって自由を奪われることのない家庭生活は、資本主義のもとでは不可能であろうとされた。しかし、このような見方からすれば、ブルジョア社会にあっては、自由結婚と月並みの結婚との区別を強調することさえ困難なはずであった。ともあれエイヴリング夫妻の婚姻関

係は、彼らの婦人観によって説明できないものに発展しようとしていた。

一方、マルクス主義政党樹立のための彼らの努力は、必ずしも成功しなかった。一八八六年の秋、エイヴリング夫妻は、アメリカ社会主義労働党に招かれて大西洋を渡った。同党は依然としてドイツ人移民の支配下にあった。しかしエイヴリングは、「アメリカ労働者の階級意識の最初の自然発生的な表現」である労働騎士団と協力するため、党のアメリカ部門を強化する必要を説き、エレノアも主として同じ目的のため、婦人の入党を勧告した。そして二カ月半のうちにニューヨークをはじめ三十五の諸都市で講演を行なうという精力的な旅行がつけられた。<sup>(1)</sup>しかし労働騎士団をめぐって彼らと対立していた党のドイツ人指導者は、エイヴリングがアメリカ滞在中、党費で贅沢な生活を送り、「労働者の金をだましとった」と公然と非難した。この非難がセンセーショナルな仕方でもロンドンに伝えられ、彼の名誉回復のために、エンゲルスまでが奔走しなければならなかった。<sup>(2)</sup>

(1) Edward Aveling, *An American Journey* (New York, n. d.) 及び Edward and Eleanor Marx Aveling,

*The Working-Class Movement in America* (London, 1888) を参照。彼らの見解は、アメリカ在住のドイツ人は「母国の運動が排除してしまつた要素……ラッサール主義者、失意の野心家、あらゆる種類のセクト主義者——の見本」であるといふ。エンゲルスの評価と一致してゐた。Engels to Laura Lafargue, 24 Nov. 1886, Engels-Lafargue, *Correspondance I* (Paris, 1956), 408.  
(2) この間の事情については Dorothy Rose Blumberg, 'Dear Mr. Engels', *Labour History* (Spring 1964) が比較的くわしい。Aveling's Circular to the Sections of the S. L. P. (26 Feb. 1887) は、イリノイ州立歴史図書館に写真版が保存されてゐる。そのほか、*New Yorker Volkszeitung*, *Chicagoer Arbeiter-Zeitung*, *Herald* (New York), *Daily Tribune* (New York), *Evening Standard* (London) などに報道されてゐる。

一方、アメリカ労働運動の経験が、英国におけるエイヴリング夫妻の政治活動に明確な目標をあたえていた。セクト化した社会主義の形態にとらわれないイースト・エンドの急進派労働者を中心に、労働者の階級政党を組織することが彼らの関心事となつた。一八八七年初頭、エイヴリング夫妻がアメリカから帰つてまもなく出版された『資本論』第一巻の英訳が、彼らの新しい活動に理論的根拠をあたえるものと期待された。エイヴリングが

サミュエル・モーア (Samuel Moore)<sup>(1)</sup> の翻訳に参加したのは二年半まえのことであり、エンゲルスの指導のもとに「労働日」に関する章など、主として叙史的な部分を担当し、その間エレノアは、二重訳の誤りを防ぐため「ブルー・ボックス」からの引用を検証してゐた。『アシニアム』紙上に発表された最初の書評では、マルクスは、工場立法の実証的研究にとくにすぐれた社会史家として評価された<sup>(2)</sup>。おそらくこれが、英国中流階級から期待され得るもつとも好意的な批評であり、エンゲルスも、それがのちの書評の「基調」をなすものと期待してゐた<sup>(3)</sup>。

やがて英国内の代表的な反響は、限界効用学説を採用したバーナード・ショウによるマルクス価値論の批判というかたちをとり、同じくフェビアン社会主義者で今ではエイヴリング夫妻を憎悪する、かつてのエイヴリングの恋人ベザント夫人が、「矛盾と悪しき形而上学のこの沼泥は、近代社会主義の安全な基礎たり得ない」と宣言して、価値論論争に終止符を打った<sup>(4)</sup>。このころから『資本論』の売行も急激に低下した<sup>(5)</sup>。フェビアン批判とならんでアメリカ社会主義者のエイヴリングにたいする中傷

が、これに影響したものと思われる。事実、英国における『資本論』の受容と、英国社会主義運動に占めるエイヴリング夫妻の地位とは、きわめて密接な関係にあったようである。

(1) 事業に失敗した前工場主、弁護士で、第一インターナショナルにも参加し、マンチェスター時代からのエンゲルスの友人。

(2) 「この有益な立法が最近他の国々にこれほどまで普及したのは、彼〔マルクス〕の影響に負うところが大きく」、「もしヨーロッパが、さし迫ったと彼〔マルクス〕の考える社会革命からまぬがれようとするならば、それは、この種の方向に迅速な処置をとることによって、はじめて可能になるであろう」と彼は考えている。』*Athenaeum*, 5 March 1887.

(3) Engels to Laura Lafargue, 10 March 1887, *Correspondance* II, 20.

(4) *Pall Mall Gazette*, 6, 7, 12, 13, 24 May 1887.

(5) 第一刷五百部は、その約半数がアメリカに送られ、最初の二、三カ月のうちにほとんど全部売りつくされた。しかしそのあと、一八八七年七月からの一カ年は、印税収入が十二ポンド三シリング九ペンス、一部三シリング九ペンスとして、わずか六部売れたにすぎなかった。Engels to Laura Lafargue, 10 March 1887, 13 Oct. 1888, *Correspondance* II, 20, 171.

\* \* \*

演劇にたいするエレノアの関心は、父マルクスからうけついでのものであり、このころ彼女は、劇作家として注目されはじめた夫エイヴリングとともに、英国演劇界の「革命」に関係するようになった。英国の劇場に、新しい息吹きが流れていた。各種の技術革新が舞台の可能性を拡大した一方、劇場建設のブームもはじまっていた。観客も次第に「上品」になり、非国教徒も劇場にたいするかつての反感を失いつつあった。余暇をもつ階級の発生がマティネーを可能にし、それが劇作家に新しい演劇、新しい思想の実験をこころみる機会をあたえていた。「思想の劇場」とよばれるものが誕生しようとしていた。それとともに演劇批評が職業として成立するようになり、舞台はたんに娯楽のためだけのものではなくなり、社会問題について見解を表明しはじめたのである。大胆な若い劇作家が、在来の道徳や社会通念を攻撃しはじめた。なかんづく彼らは、ブルジョア社会のとりとみなされた結婚と財産の二つの制度ととりくみ、姦通が恰好なテーマとなった。今、エイヴリング夫妻は、

彼らの婦人観、そして彼ら自身の婚姻関係に新しい表現をあたえるための機会をもったのである。

英国の新しい演劇運動は、おもにヘンリック・イブセンの影響から出発した。その先覚者は、スコットランド出身のジャーナリストで非宗教論者のウィリアム・アーチャー (William Archer) であり、エイヴリングの『プログレス』紙上でスカンディナヴィア文学を紹介したのもアーチャーであった。エレノアが『人形の家』に夢中になったのは、このころである。この作品は、一八八二年、『ノラ』と題して英訳されたが、進歩的な劇作家のサークル以外、ほとんど関心をひかなかった。一八八四年、その改作が、当時まだかけ出しの劇作家 H・A・ジョーンズ (Henry Arthur Jones) により、『*Breaking a Butterfly*』と題して上演されたが、そこでは夫ヘルマーが、妻のおかした罪を背負う理想的な人間として描かれ、エイヴリングが批評したように、イブセンは「去勢」されてしまった<sup>(1)</sup>。エイヴリングが理想とする演劇は、ハムレットが語ったように、「自然に鏡をあて……時代の年齢と身体 (the very age and body of the time) とについて、その形態と刻印を示す」ものであった。しかもこの「時代の

身体」なるものは、学問の領域でと同じく舞台でも、タブーとされていた<sup>(2)</sup>。このタブーを打破するものが自然主義であり、英国におけるその新しい展開に、エイヴリング夫妻は、イブセンを通じて貢献しようとした。

(1) *To-Day*, June 1884.

(2) Edward Aveling, 'Das Drama in England', *Neue Zeit*, III (1885), 171.

当時エレノアは、同好者のあいだで『人形の家』を上演する計画をたて、シヨウに参加を要請する手紙を書いた。「勉強すればするほど、私には彼「イブセン」が偉大に思われます。彼の劇が『終りをもたず』我々を突きはなすと人々が不平をいうのは、何と奇妙なことでしょう。……我々は、我々の小さなドラマ、喜劇、悲劇、茶番劇を演じ、おわるとまたはじめからやり直すのです。もし我々が、人生の諸問題に解決を見出すことができたら、この物憂げな世の中は、万事、ずっと楽になるでしょう<sup>(1)</sup>。『人形の家』は、一八八六年一月十五日、エレノアの家で上演された。英国最初の上演ではなかったが、画期的なものであった。——エレノアがノラを、エイヴリングがヘルマー、シヨウがクログスタット、そし

てウィリアム・モリスの娘メイ・モリスがリンデン夫人を演じた。

(1) Eleanor Marx Aveling to G. B. Shaw, 2 June 1885, British Museum.

エレノアのメランコリの背後には、現実との内面的な闘争がひそんでおり、それがフローベルを通じて明瞭に意識されるようになった。当時彼女は『ボヴァリー夫人』の翻訳をはじめていた。この書物が、ナポレオン三世の政府によって背徳を理由に起訴されたことは、彼の「不滅の名譽」である、と翻訳の序文でのべている。シエークスピアの理想に忠実に、フローベルはブルジョア道徳を鏡にてらし、人々がその鏡にうつった自らの像に衝撃をうけたのは当然であるという。エレノア自身は、エンマの性格を通じて描かれた自己欺瞞の問題に興味を抱いていた。エンマにとって「生活がリアルでなかった

しだしていた。エンマは、エレノアの理想とエイヴリンガの墮落とを一身に体现して破滅した——そのように読みとることもできたのである。他方、エンマは「不可能な人物」であり、しかもそのおかれた環境からすれば「不可避の存在」であるというエレノアの見方が、それ自体、ブルジョア社会の強烈な道徳的批判を含んでいたことはいうまでもない。

(1) Eleanor Marx Aveling, Introduction to her translation of Flaubert's *Madame Bovary* (London, 1886),

xx.

同じ一八八六年、前述のファニーヴァルがシェリー協会を組織し、検閲で禁止された *The Cenai* を非公開のうちに上演することに成功した。しかし協会のなかには、シェリーを「騒々しい粗野な街頭の社会主義」から区別しようという動きがあり、これにたいしエイヴリング夫妻は、「シェリーの社会主義」と題する講演を準備し、これを小冊子として配布した。それは、商業道徳を非難し、階級衝突の不可避ことを信ずる社会主義者としてのシェリーを描いたものであって、ゴドウィンの影響が強調され、シェリーを「社会主義の前衛のひとり」

と呼んだマルクスの言葉が引合いに出されている。<sup>(2)</sup>

(1) Shelley Society, *Notebook*, 1888, 190.

(2) Edward and Eleanor Marx Aveling, *Shelley's Socialism* (London, 1888), *passim*.

その間エレノアは、劇作家エイヴリング(彼はアレク・ネルソン Alec Nelson という変名を用いた)の大成のなかに、彼女自身の将来の活路を見出そうとしていた。エイヴリングが盲目の詩人マーston (Philip Bourke Marston) と共同で書いた一幕劇『試練』*A Test* は、一八八五年十二月、ロンドンの二流の劇場ラドブルック・ホールで上演され、ネルソン自身が田舎医者をして、エレノアがその妻を演じた。ある劇評は、彼女が「驚くべき量力と感情」を示したと賞讃したが、劇そのものは失敗であった。<sup>(1)</sup> ついで一八八七年十一月、ネルソンまたはエイヴリングの第二の作品『海のほとり』*By the Sea* が、同じラドブルック・ホールで上演された。そこでエレノアは、少女時代の恋人を慕う人妻の役を演ずるが、彼女の演技は酷評をうけ、俳優としての彼女の野心も、一瞬のうちには崩れ去ってしまった。<sup>(2)</sup> エレノアの不幸をよそに、エイヴリングはようやく、劇作家としての成功を掴もう

としていた。『海のほとり』が各地で好評を博した。舞台を放棄したエレノアはイブセンの翻訳にあたり、『民衆の敵』が『社会の敵』*An Enemy of Society* として一八八八年に、『海の夫人』*The Lady from the Sea* が一八九〇年に出版された。一方エイヴリングは、ホーソーンの『緋文字』を演出し、冷酷な詩情の再現につとめたが、その後彼の創作活動は、たいした進展をみせなかった。

(1) *Dramatic Review*, 19 Dec. 1885.

(2) *Ibid.*, 3 Dec. 1887.

英国演劇史上に一時代を画するイブセン論争は、一八八九年の『人形の家』上演にはじまる。それは、婦人の解放と「真実の道徳」とを求める「イブセン派」と伝統的な家庭道徳を擁護する「反イブセン派」との論争であり、その一環として、『人形の家』の続編が書かれさえした。エレノアはユダヤ人の作家イズラエル・ツァングウィルと共同で『人形の家』の修繕』を書き、ノラが英国風の「良識」にしたがって家を出なかった場合を想定して物語を展開した。<sup>(1)</sup> エイヴリングも「イブセン派」の先頭に立って活躍した。これら一連の努力を通じエイヴリング夫妻は、愛情と義務、自由と因襲の相克というひと

つのテーマを追求し、イブセンに大きく依存した。しかしイブセンにも見られない「十九世紀の叙事詩」と彼らと呼んだものが、今、国内的にはロンドン港湾労働者のストライキ、国際的には第二インターナショナルの成立とともに新らしい出発点に立った社会主義運動のなかに、展開されつつあった。

(1) Israel Zangwill & Eleanor Marx Aveling, 'A Doll's House' *Repaired*, London, 1891.

(2) *Time*, July 1890.

\* \* \*

「フランスのポシピリストと英国のマルクス主義者とを争わせて漁夫の利を占めることが、きわめて狡猾な策略家ハインドマンのたいへん巧妙な詭計である」と、エレノアは父親譲りの毒舌で、インターナショナル設立をめぐる複雑な葛藤を説明している。<sup>(1)</sup> しかもそのハインドマンとの交渉にあたり、「値切ることには、ユダヤ人である私とベルンシュタインにまかせておきなさい」と姉のローラに書いている。<sup>(2)</sup> しかしバステュー襲撃百年記念日、パリでは二つのインターナショナル創立大会が開催

された。この大会におけるエレノアの役割は、表面上は主として通訳のそれであったが、彼女の存在が、マルクス派の大会に第一インターナショナルまでさかのぼる象徴的な意義をあたえていた。

(1) Eleanor Marx Aveling to Laura Lafargue, 30 May 1892, Bottigelli Col.

(2) Eleanor Marx Aveling to Laura Lafargue, 11 April 1889, *Ibid.*

一方、国内の新組合運動にたいする彼女の主要な貢献は、ガス労働者組合にたいするものであった。ストライキ委員、支部拡大委員として活躍し、エイヴリングとともに、ガス労働者を中心に、パリのインターナショナル大会の決定にもとづく八時間労働法獲得のためのメーデー示威集会を組織した。その直後に開催されたガス労働者組合の一九〇〇年年次大会で、エレノアは組合執行部に出選され、彼女が作成した新綱領・規約が採用された。それは、すべての労働者を男女とも平等の立場で受入れるという、産業別・職能別の差別を超越したジェネラル・ユニオンの理想をかかげ、生活と労働の物質的条件だけでなく、「この世の涙と笑い、悲しみとよろこび、

労働とレジャー」のより平等な分配をうたうものであった。<sup>(1)</sup>

(1) National Union of Gasworkers and General Labourers, *Revised Rules*, 1892, *passim*.

その間ドイツ社会民主党は、エンゲルスのいう「非合法手段の強力な使用によって再び獲得した合法的手段をもって」組織の拡充に奔走していた。しかも国際的には、<sup>(1)</sup>インターナショナル統一の問題がのこっていた。統一は、一八九一年のブラッセル大会で達成されるが、それに先立ち、一八九〇年十月、エレノアは統一準備のため、フランス労働党のリール大会およびドイツ社会民主党のハレ大会に出席した。このときハレからエンゲルスに書いた手紙のなかで彼女が、フォルマー (Georg von Vollmar) を中心とする改良主義者が党にとって危険な存在であることを指摘する一方、ドイツの党員の多くが、英国の労働組合員と同じく「見るのも苦痛なほど勿体ぶり、ブルジョア顔をしている」とのべているのは興味ぶかい。<sup>(2)</sup>

(1) *Sozialdemokrat*, 27 Sept. 1890.

(2) Eleanor Marx Aveling to Engels, 14 Oct. 1890.

photocopy, IISG.

インターナショナルとの結びつきが、エイヴリングの英国社会主義運動主流への復帰を可能にした。一八九三年の独立労働党 (ILP) の創立大会で、彼は執行部に選出され、綱領の作成に参加した。しかし彼は、ILP 会長のケア・ハーディーが保守党に接近しているものと判断し、とくに政府にたいするハーディーの失業対策要求が、結局は議会内の労働者議員ではなく、保護貿易論者によって支持された点を強調した。<sup>(1)</sup> ハーディーが政治と宗教とを同一視したことも、彼の批判的であった。しかし一八九四年のメー・デーをめぐる内紛が表面上の理由となって、エイヴリングはロンドン地区 ILP から除名された。本当の理由は、彼にたいする一般的な不信のたかまりであった。

(1) *New Yorker Volkszeitung*, 19 Feb. 1893.

\* \* \*

かつてマルクスは、長女のジュニイは「私に似ている」が、トウッシイは「私だ」といったことがある。<sup>(1)</sup> しかしそうしたエレノアも、今では彼の偉大な遺産の一部



分にすぎなかった。彼の理論を指針とする労働運動は、ヨーロッパのほとんどの国に波及していた。友人エンゲルスは、彼の遺稿と蔵書をうけつぎ、『資本論』続巻の編集に没頭しただけでなく、マルクス姉妹の保護者もって任じていた。しかしエレノアは、エンゲルスの婦人関係にたいする一種の留保を父から継承していた。亡くなったエンゲルス夫人エリザベス・バーンズの姪マリ・エレン・バーンズ(愛称「パンプス」)が、実業家のパーシイ・ロッシュヤと結婚したあとも、エンゲルス家に君臨していた。エレノアの幸福な少女時代の証人ともいふべきヘレーナ・デムートもエンゲルス家に仕えていたが、一八九〇年、死亡した。その息子フレデリクとエレノアは親しくなるが、はじめ彼を、エンゲルスの息子と信じていた。「フレデイにたいするエンゲルスの苛立ち、理解できるがフェアではない。自分の過去が血と肉になって——と私は想像するが——現われるのに出会うことを何びとも好まないだろう。私はいつも、犯された罪と過失を意識してフレデイに会って来た。この男の生涯は何とうみじめなものだろう。彼が一部始終それを語るのを聞くのは、私にとって悲惨であり恥辱であ

(2)「労働者の家庭の養子として育てられたフレデイは、マルクス家身中の刺であった。」

(1) Eleanor Marx Aveling to Olive Schreiner, 16 June 1885, *Adelphi*, Sept. 1935. ローラは容貌・性格とも母親に似ていた。

(2) Eleanor Marx Aveling to Laura Lafargue, 19 Dec. 1890, *Bottigelli Col.*

エレノアにのこされた父の形見の主要な部分は、彼女の「ユダヤ人的特徴」であった。同じくユダヤ人であるマックス・ベアは、エイヴリングにたいするエレノアの献身的態度を、婚姻を神聖視するユダヤ人の結婚観から説明している。<sup>(1)</sup>しかしマルクス自身は、ユダヤ教および世俗の神である黄金からの解放をブルジョア社会からの解放と同一のものと考え、ロンドンのユダヤ人社会ともほとんど交渉をもたなかった。おそらくエレノアは、家族のなかでユダヤ民族にひきつけられたただひとりのメンバーであった。彼女の友人のなかには、若くして自殺したユダヤ人の閨秀作家エイミー・レヴィイがおり、その代表作『ルービン・サククス』をエレノアはのちに独訳している。<sup>(2)</sup>この書物は、教育あるユダヤ人が民族的制約をこえてより大きな社会へ出ようとするときに遭遇する

様々な障害を通じてロンドンのユダヤ人中流社会を描いたものであり、ユダヤ人による「唯物的宗教」の批判と「家庭と同類への愛情」が主要なテーマをなしていた。

(1) Max Beer, *Fifty Years of International Socialism* (London, 1935), 74.

(2) Amy Levy, *Reuben Sachs: a Sketch* (London, 1888).

独訳: *Neue Zeit*, X-I, Nr. 1-12 に発表。

しかし最大の関心事は、マルクスの遺稿をふくむエンゲルスの「財産」処理の問題であった。当時カウツキと離婚したルイーゼが老人エンゲルスの秘書となったが、彼女は、「遺稿」をドイツ社会民主党に確保するため、ペーベルとアドラーとに協力する密使でもあった<sup>(1)</sup>。やがて彼女は、ウィーンから派遣されたエンゲルスの侍医ルードヴィヒ・フライベルガーと結婚するが、フライベルガーは、一八九三年七月二十九日に作成されたエンゲルスの遺言の証人でもあった。この遺言によると、サミュエル・モーア、ベルンシュタインおよびルイーゼが遺言執行人にえらばれ、遺産のうち一〇〇〇ポンドはドイツ社会民主党の選挙資金として用いられ、三〇〇〇ポンドは「パンプス」にあたえられることになった。さらにドイ

ツ社会民主党は、エンゲルスの所有または管理するすべての書物(マルクスの蔵書をも含む)および彼の版權を譲渡されることになった。彼の原稿や私信はペーベルとベルンシュタインにあたえられ、マルクスの手になる原稿や手紙(マルクス宛を含む)はエレノアに帰されることになった。ルイーゼは彼の邸宅・家具の一切をあたえられ、さらにのこりの財産の四分の一を受取ることになった。あとの四分の三は三等分し、エレノア、ローラおよびジェニイの子供たちのあいだで配分されることになった。この遺言は、ルイーゼを最大の利益者とする一方、マルクスの書物や遺稿の処分をとりきめながら、マルクスの法定代表人であるエレノアを遺言執行人のなかに加えなかった点で注目すべきものであった<sup>(2)</sup>。

(1) Bebel to Victor Adler, 20 Dec. 1890, *Victor Adler Briefwechsel mit August Bebel und Karl Kautsky* (Wien, 1954), 66.

(2) Engels, Will, Somerset House.

そのころルイーゼは、フレデイがマルクスの息子であるという噂を流布していた。エレノアは、彼がエンゲルスの息子であると信じていた。驚いたエンゲルスは、彼

が自分の息子を放棄したというエレノアの見解を反駁する権限をルイーゼにあたえた。その間、ナイジェリアで上級判事をつとめていたサミュエル・モーアがロンドンを訪れ、エンゲルスの遺言追加(一八九五年七月二六日付)に協力した。ここでは「パンプス」の取得分が若干減少されたほか、エレノアのもとへ行くはずであったマルクス・エンゲルス往復書簡がドイツ社会民主党にあたえられることになった。「フレディ」問題をめぐるエンゲルスのエレノアにたいする態度の一端がうかがわれる。その上エンゲルスはモーアにたいし、フレディがマルクスの息子であることを証言した。モーアからこのことを知らされたエレノアは狼狽し、直接エンゲルスにたずねたが、喉頭癌におかされた老人は、黒板を使って事実を彼女に知らせた。エンゲルスが最後の息をひきとる前日のことである。<sup>(1)</sup> 異母兄の発見は、エレノアに新しい力をあたえた。リーブクネヒトのマルクス小伝に言及しながら、「人間マルクスは『政治家』『思想家』マルクスほどには首尾よく行かないでしょう」と書いているが、<sup>(2)</sup> 彼女はフレディに特別な愛情をもつようになつた。

(1) Louise Freyberger to Bebel, 2 Sept. 1898, quoted

in Werner Blumenberg, *Karl Marx in Selbstzeugnissen und Bild dokumenten* (Hamburg, 1962), 116—7 及び Engels, Will, Somerset House を参照。  
(2) Eleanor Marx Aveling to Laura Lafargue 24 Dec. 1896, photocopy, IISG.

「遺稿」の分割は不幸なことであった。エレノアは、父の伝記を書こうと思いついたが、そのために不可欠なマルクス・エンゲルス往復書簡は、当時、ロンドン在住のドイツ社会民主党代表モテラーの家の、二重鍵をかけたケースにおさめられ、エレノアの手にはとどかなかつた。彼女はマルクスの英語の論文の編集にあたり、『ニューヨーク・トリビューン』紙にのつた一八四八年革命の歴史を『革命と反革命』(*Revolution and Counter-Revolution or Germany in 1848*, London, 1896)として出版し、同じくクリミア戦争を扱う『トリビューン』の論文から『東方問題』(*The Eastern Question*, London, 1897)を編集したが、前者はすべてエンゲルスの手になり、後者もエンゲルスの論文をいくつか含むという事実は、モテラーの箱の往復書簡に秘められたままであつた。

かつてエンゲルスは、エレノアだけが、英国社会主義

の十分な歴史を書くことができるとのべた。<sup>(1)</sup>一八九五年、彼女の「英国だより」がセント・ペテルスブルグの月刊評論誌『ロシアの富』(Russkoy Bogatstvo)に連載された。また彼女は、ヴルムの『国民百科辞典』に「英国における労働者階級運動」を書き、一三八一年の農民戦争から独立労働党にいたる歴史をあとづけた。<sup>(2)</sup>当時彼女は、カウツキーやベルンシュタインがはじめたマルクス主義者による歴史研究の一翼を担っていたのである。

(1) Engels to Kautsky, 29 Sept. 1892, *Friedrich Engels's Briefwechsel mit Karl Kautsky* (Wien, 1955), 370.

(2) Wurm's *Volks-Lexikon* II (Nürnberg, 1895), 1236—1259. 英語版 *Working-Class Movement in England*, London, 1897.

エンゲルスの遺産は二万五千ポンドにおよぶ莫大なものであり、<sup>(1)</sup>エレノアも数千ポンドを得て、はじめて生活に余裕を見出した。ロンドン南郊シドナムに家を手入れし、ここを本拠として組合運動と社会主義運動に余生を捧げようとした。

(1) 正確には二五二六五ポンド一ペンス。

\* \* \*

エンゲルスの死とともに、社会民主主義に転機がおとずれた。新しい情勢の出現が伝承された教説の再評価を要求したが、正統の仮面のもとに、日和見主義的傾向が、ドイツ社会民主党の大勢を左右するようになった。

他方、エイヴリング夫妻は、ハインドマンの社会民主主義連合(SDF)と和解し、一八九六年ロンドンで開催されたインターナショナル第四回大会が、彼らの結束をさらに強化していた。

その間、エイヴリングの私生活上の「事件」が、シドナムの平和を乱していた。エイヴリングの別居した妻イザベルは、一八九二年に死亡しており、今、彼は、インターナショナルのための資金募集の演劇会で知りあったエヴァ・フライという音楽教師の娘に接近するようになった。一八九七年六月、エレノアが、当時ロンドンで開かれた国際炭坑労働者大会に出席していたとき、エイヴリングは、ネルソンなる芸名でもって、エヴァと正式に結婚した。それは「合法的な姦通」であり、自由恋愛の理想を嘲笑するものであった。失意の劇作家とかげだし

の女優とは、エレノアを悲劇の主人公に仕立てた芝居を企てたものと思われる。しかもエイヴリングは、一八九五―六年のエレノアの遺言によって、彼女の財産一切の相続人に指定され、この芝居から金銭的利益を期待することもできたのである。

エイヴリングが失踪したときの苦悩を、エレノアはフレディに伝えているが、再婚の事実はまだ知られていなかった。今、彼女はその全存在を、十九世紀最大の資本と労働の闘争のひとつ、一八九七年秋の機械工組合員のロックアウトに投入した。エレノアは、ドイツの労働者にあてた訴えのなかで、雇主が歴史上はじめて、個々の雇主としてではなく、階級としての雇主のために階級闘争をはじめた点を強調した。<sup>(1)</sup> ドイツからの義捐金は、海外から送られたロックアウト資金の約半分、一万四千ポンドに達した。しかし闘争は長期化し、翌年はじめ組合は、八時間労働の要求を撤回して降伏した。

(1) *Forwards*, 6 Nov. 1897.

一八九七年秋、エレノアは、地方選挙の SDF 候補応援演説のためランカシアを訪れたが、同行のエイヴリングは肺炎をわずらい、彼の持病の濃瘡も悪化した。転地

療養、入院、手術と、エレノアの献身的な看護がつづいた。当時彼女は、「人は道德の病いを肉体の病い以上に責める権利をもたないことが、私にもようやくわかりはじめたのです」とフレディに書いている。<sup>(1)</sup> やがてエイヴリングの容態が好転したので、エレノアはマルクスの遺稿の編集を再開するため、三月二十七日(一八九八年)、エイヴリングを、保養地のマーギットからシドナムへ連れてかえった。平穩が訪れるかのようにみえた矢先、三月三十一朝、エレノアは、エイヴリングとエヴァとの結婚を知らせる手紙をうけとった。すべての理想が辱しめられ、すべての犠牲が嘲けられた。自殺を決意したエレノアを、エイヴリングが幫助したことはほとんど疑いない。しかし薬局から青酸が到着するや、彼は急にロンドン行きを思い立った。しかも卑劣な夫にたいするエレノアの最後の手紙は、「愛」の字でむすばれていた。<sup>(2)</sup> その後

のエイヴリングの行状、検察官の取調べ、社会主義者の驚愕、友人たちの憶測は、それ自体ひとつの推理小説を構成し得るものである。エイヴリング自身、濃瘡が悪化し、四ヵ月後、ネルソン夫人のマンションで死亡した。

(1) *Eleanor Marx Aving to Frederick Demuth*, 5

Feb. 1898. *Labour Leader*, 30 July 1898.  
(2) *Reynolds's Newspaper*, 10 April 1898 に発表。

\* \* \*

エレノアの死後まもなく発表された彼女のための詩は、彼女の「唯物論」が結局は「死の福音」であったことを嘆じた<sup>(1)</sup>。同じような論法から、ルイス・フォイヤーは、エレノアの「マルクス主義的教養」がこの悲劇の「非マルクスの」結末をもたらした——即ち、「マルクス主義的倫理」が自己否定を行ない、「自己をいけにえにする祭事」をつくりだしたという<sup>(2)</sup>。しかしエレノアは、そのような「唯物論者」でも「マルクス主義者」でもなかった。キリスト教の信仰には無縁であったが、隣人愛の情熱が、彼女の社会主義、国際主義、「マルクス主義」の基礎にあったことは否定できない。また彼女は、バーナード・ショウのいうイブセンの信念即ち「進歩はあらゆる段階で既存の義務の拒否を伴う」という信念<sup>(3)</sup>に共鳴しながら、彼女自身、内面的には、ノラであるよりは、エイミー・レヴィの描いたユダヤ人の少女に近かった。エレノアは、彼女のいわゆる「別の側から物事を見る力」

によって、早くから、無邪気な芸術家である善きエイヴリングと、貪欲と非人情の権化ともいべき悪しきエイヴリングとの相克を見抜いていた。そして彼女の誠意とブルジョア社会克服のための共同の努力が、その自己疎外から彼を救い得るものと信じていたのである。

(1) *Labour Leader*, 16 April 1898.

(2) Lewis Feuer, *loc. cit.*

(3) G. Bernard Shaw, *The Quintessence of Ibsenism* (London, 1891), 7.

エイヴリングは、「忘却の中に埋めらるべき」人であったが<sup>(1)</sup>、ショウは『医者<sup>(2)</sup>のディレンマ』(*The Doctor's Dilemma*, 1906)のなかのデュベダトとして、彼に不朽の地位をあたえた。野心的な画家デュベダトは、エイヴリングと同じく二重結婚し、手あたり次第に借金した。しかし奇癖はすべて、彼の芸術と天分のためと解され、むしろショウは、彼をとりまく医者<sup>(3)</sup>の奇癖を批判する。しかしエイヴリングのなかに、ショウのいうような天才的な芸術家を見出すことは困難である。他方、フォイヤーは、一切の責任をエイヴリングのマルクス主義に帰している。しかし彼の墮落は、マルクス主義とは無関係のも

のであり、社会主義者となるまえに、すでに彼は、道德的に種々の疑惑を招いていた。彼の放縦な生活は、むしろ初期の戦闘的な無神論と関係があり、生物学的知識と耽美的快樂主義とを綜合した彼の「進化の福音」こそ責めらるべきものであった。

(1) W. Stephen Sanders, *Early Socialist Days* (London, 1927), 82.

ヨーロッパとくに英国社会主義にたいするエレノアの貢献は、エイヴリングの影響がなかったならば、さらに顕著なものであったことだろう。事実、労働者階級の運動は、ボヘミアンであるよりは清教徒的であり、エイヴリングの介在をながく許すことができなかった。その上彼のマルクス主義は、彼特有の進化論の上に接木されたものであり、その扱い方は機械的であった。

エレノアが死んだとき、アドラーはカウツキーに書いてある——「可愛そうなトゥッシィ!……だが主要なことは、マルクスの遺稿がどうなったかということである<sup>(1)</sup>。」とにかく遺稿は、ほぼ無事にローラの手に移ったものと思われる。エレノアによって遺稿の編集者に任命されたカウツキーは、その後ローラと協力し、フラン

ツ・メーリングをも加えてその整理・刊行にあたった。一九一一年、ローラは夫ポールとともに、自らの手で生命を絶った。彼らには子供がなかったので、遺稿の一部は散逸したと思われるが、その大半は、ジェニ・ロンゲの子供たち、とくに「祖父の記憶を神のように崇拜した」娘のジュニの手に移った<sup>(2)</sup>。カウツキーが管理していた資料は、のちにドイツ社会民主党のアルヒーフに移され、ベルンシュタイン・リベールに委託されていたエンゲルスの遺稿といっしょにされた。しかしそれによってマルクス主義の中心的な資料が統一されたわけではなかった。リャザーノフがモスクワのマルクス・エンゲルス研究所のために精力的な資料の蒐集を行なった一方、ドイツ社会民主党のアルヒーフは、一九三〇年代、弾圧を逃れてアムステルダム<sup>(3)</sup>の国際社会史研究所に移され、この二大中心地における資料の分割が、国際社会主義運動の分裂をそのまま表明するようになった。

事実、エレノアに父親の手紙を読むことさえ許さなかったような不幸な分裂が、今日なおつづいているのである。

(1) Adler to Kautsky, 4 April 1898, Adler, *Briefwechsel*.

(39) エレノア・マルクス

*hasel*, 242.

(2) E. Bottigelli, introduction to 'Lettres et documents de Karl Marx', Istituto Giangiacomo Feltrin-

elli, *Annali* (1958), 149.

(一橋大学助教授)